色えんぴつ

就実大学人文科学部初等教育学科

2008年2月1日発行 第2号

〒703-8516 岡山市西川原1-6-1
Tel. 086-271-8111（代表）
shotou@shujitsu.ac.jp

http://www.shujitsu.ac.jp/web/department/cultural/elementary/index.html

エンジン全開。さらに飛躍を！

初等教育学科長　北川　歳昭

1年生の皆さん、2008年がさらなる飛躍の年でありますように!

入学後、はや1年。マラソンなら10キロ付近かな。一斉にスタートし、しばらくは団子状態でしたが、そろそろ先頭集団、それに続く集団、そして、やや遅れ気味の集団と、少しばらついて来たように思います。ゴールはまだ先、遅れを取り戻すことも可能です。自分の目標を目指してみんな完走して欲しいと願っています。

10月からは本学科の中心的施設E館の使用が始まり、教室の備品も順次整備されています。11月24日には本学科の開設記念式典・特別講演会が開催されました。「就実・初等」の教育・研究・実践の環境が整いました。自主ゼミも始まりました。春には西川原・就実駅が営業開始。2期生が入学すると、1期生は「先輩」になりますよ。張り切らないわけにはいきませんね。

皆さんの共通の目標は、子どもたちから「センセイ」と呼ばれる仕事に就きたい、そうでしたね。学生時代はそのための準備。あらゆる機会を捉えて貪欲に自分を鍛えましょう。子どもと接するボランティアなどにぜひ積極的に参加しましょう。

ところで、子どもは大人に強い劣等感（劣等コンプレックス）を持っていて、それが大人になりたいという成長の動力源になるそうです。皆さんも1つや2つ劣等感を持っているでしょう。問題は、その劣等感を成長の動力源として使えるかどうかです。歯を食いしばり、悔し泣きをしながら頑張るエネルギーは、劣等感から生まれます。自分の劣等感や失敗体験をバネにして自分を育てていきましょう。

11月16日に宇野小学校の音楽会を参観させていただきました。演奏レベルの高さに驚きましたが、何よりも、小さな身体で大きな楽器を懸命に操って演奏する子どもたちの姿に感動しました。指揮者の先生を見る真剣なまなざし、演奏後の誇らしげな表情、自分の成長を実感したことを窺わせる堂々とした態度。先生方の指導のご苦労も偲ばれましたが、同時に、子どもたちの成長の瞬間に立ち会えるセンセイって、すばらしい職業だなとつくづく思いました。

陰山英男先生の講演を聞いて

インタビュアー
初等教育学科1年
高野　昌幸

2007年11月24日、初等教育学科開設・教育実践研究センター開設記念特別講演会が行われました。講師に百ます計算や多数の著書で教育界にとどまらず大変有名な陰山英男先生をお招きしました。陰山先生は現在午前中は立命館小学校の副校長、午後は立命館大学の教授として活躍なさっています。

「学力の新しいルール」という演題のご講演では、現在の指導要領の説明から始まり、子どもの日常生活が学力と密接な関係にあることを指摘なさいました。現代の子どもの生活には睡眠時間の減少、テレビの視聴時間の増加がみられ、朝食を食べない子どもが増えているそうです。「偏差値とは違うところに最大の問題点がある」という先生の言葉がとても印象的でした。小学生が鉄棒でスゴイ技を披露する映像には会場全体が驚きの声をあげました。子どもをほめると気持ちよく学習し、自信をもち、大人の想像を超えるいろいろなことができるようになります。子どもには無限の可能性が秘められていると改めて実感しました。

講演の後、控え室にうかがい、短い時間でしたが陰山先生にインタビューさせていただきました。

Q. 陰山先生は岡山大学法学部ご卒業だそうですが、なぜ教育関係の職に就いたのですか?

A. 卒業後は放送局に就職しようとしたけれど、採用試験に落ちてしまったんです。そうしたら親に「自分の夢が叶うまで、田舎で先生でもしてろ!」と言われたので学童保育で1年間働きました。働いているうちに子どもと接するのが楽しくなり、子どもたちの役に立てるような人間になりたいと思い始め、猛勉強して教師という職に就きました。

Q. 百ます計算はどのようにして発案されたのですか?

A. これは私の師匠である岸本裕史先生が考えたものです。私が担任をしたクラスに「うえむら」君というあまり勉強が得意でない子がいました。私が夏休みに勉強を教えてあげようと学校においでと言ったが来なかったんです。家に迎えに行ったりもしました。けれど彼は自分から勉強に積極的に取り組むはずもなく、勉強が不得意のままでした。その1年間は彼に「自分は頑張れない子だ。何をやってもダメなんだ」と刷り込んでしまったことに気付きました。そのうえむら君が小学6年生になった時、もう一度彼を担任することになりました。ちょうどその頃、岸本先生に出会い、百ます計算を伝授されました。うえむら君に百ます計算を教えてあげると、彼は達成する喜びから勉強が好きになってくれたのです。これが始まりだと思います。

Q. 陰山先生が考える理想の教師とはどのようなものですか?

A. 理想をあげるとキリがありません。一番重要なのは「子どもを見る目をもつ教師」です。子どもをよく見ていれば、この子には何が足りないかわかります。日本にはいろいろな教材があるのでその子に適したものを見つけられます。そのためにも子どもをよく見る。よく見ているとほめるところも見つかり、ほめてあげれば子どもは伸びます。キチンと子どもを見て、子どものことをわかってあげられる先生になってほしいですね。

貴重なお話や資料を見せていただき、とても価値のある講演でした。将来教育関係に進む私たちにはとてもよい刺激になったと思います。お忙しい中、貴重な講演をしてくださった陰山先生と、講演会を開催した就実大学に感謝します。ありがとうございました。

E館誕生!!

9月末にE館が完成しました。外観や内装はとてもお洒落。それだけではなく、模擬保育室や子ども向けのミニ図書室など設備もばっちりです。そんな魅力のいっぱいつまったE館を私たちと一緒にのぞいてみましょう!!

屋上テラス

景色が一望できるテラス。ここで昼ごはんを食べている学生もいます。

3階ロビー

学生用スペースが設けられており、学習や交流の場となっています。

3階理科演習室

実験台を備えており理科教育法などの授業や講習会に使います。

2階プレイルーム

子どもの活動を隣の観察室からマジックミラー越しに見ることができます。

1階ミニ図書室

子ども向けの絵本や童話がそろっていて、学生も読み聞かせの練習ができます。

1階模擬保育室

保育園を模して作られています。授業でも使用しています。

教育保育インターンシップ

初等教育学科の１年生53名は８月から９月にかけて小学校（学童保育）・幼稚園・保育園に分かれて「インターンシップ（職場体験）」に出かけました。これは教育現場で児童や園児と直接かかわることで、その特性や実態をつかみ、自己の職業適性を考察し今後の進路に役立てようとするものです。

保育所インターンシップの感想

- 年齢によって遊び方や、友達との接し方がけっこう違うなと感じた。
- 保育士になったとき、子どもとの人間関係を作ることは大変だと思うが、一番大切だと今回学んだ。
- 保育士になりたいという気持ちがより一層強くなり、乳幼児期は一番大切な時期なので少しでも子どもの成長に貢献したいと思った。

幼稚園インターンシップの感想

- 子どもに対して先生がどのように対応するか、どんな対応をしているかを見て勉強になることがたくさんあった。
- 実際に子どもとかかわってみないと分からないことがあった。

小学校（学童保育）インターンシップの感想

- 一番楽しんでいたのは自分だったかもしれない。子どももそばに寄って来てくれて本当に嬉しかった。
- １年の時からこういった体験をすることができ、自分の課題を見つけることができた。
- 誰か一人だけのものではなく、みんなのリーダーであるということの認識と、すべての子どもに同じように接することの難しさを学んだ。

◆初等教育ニュース

●「就実大学初等教育学会」発足決定!!

初等教育学科の教員・在学生・卒業生等を構成員とする「就実大学初等教育学会」が発足することになりました。今後、学生の皆さんにとっても、学習と研究発表の場として活用されることになるでしょう。2月19日には、総会と学会発足を記念した講演会を行います。

●ミニ講演会開催

就職対策プロジェクトの一環として、身近な先輩の保育園、幼稚園、小学校の採用試験合格体験談をうかがう講演会を2月14日に開催します。魅力的な先輩をお招きする予定なのでお楽しみに。

●教員の活躍〈原 奈津子先生 学会賞受賞〉

原奈津子准教授が、『他者を知る−対人認知の心理学』（山本眞理子・原奈津子、サイエンス社、2006年）で、第9回日本社会心理学会出版賞を受賞されました。相互作用のレベル（深さ）によって他者を知るプロセス（対人認知プロセス）がどのように異なるかという点について研究を進められ、さらにこのプロセスの文化差に挑まれたことが評価されました。

●教員著書の紹介

〈宮川 洋子先生 執筆〉

C.カミイ・加藤泰彦編著『子どもの遊びと発達Ⅰ　ピアジェの構成論と物と関わる遊び』大学教育出版、2007年10月発行

乳児期から子どもの物への関わりが始まりますが、子どもが物と関わって遊ぶ中で何を学んでいるのか、積み木やしゃぼん玉遊び、クッキングの活動などの例からわかりやすく解説しています。（宮川洋子准教授が3・6・15章の翻訳と執筆を担当）

〈秋吉 博之先生 執筆〉

内山裕之・佐名川洋之編著『解剖・観察・飼育大事典』星の環会、2007年9月発行

小学校・中学校・高等学校の理科の先生方を対象に身近な材料を使ってできる観察・実験を分かりやすく解説しています。写真や図も豊富で、一般の方にも興味を持って読んでいただける内容です。（秋吉博之准教授が「マイワシの解剖」など5つの観察・実験を執筆）

※詳細はホームページをご覧ください。

スケッチブック

このコーナーでは、子どもの描いた絵などを紹介します。
今回は、就実大学の岡本悦子先生（専門：舞踊教育学）のお子さんの絵です。

我が子貴更（きさら）は、明るい自閉症児です。動きがあり、固定していない人の表情を描くことは得意ではありません。この絵は珍しく自ら鉛筆を握って描いてくれたものです。習いたてのアルファベットをTシャツに見つけて嬉しかったのでしょう。「お母さんを描いてみよう！」という気持ちの育ちが嬉しくて、母はもう何年間もこのイラストを研究室に飾っています。

（表現文化学科 表現創造コース
身体表現分野 担当
教授　岡本　悦子）

題「おかあさん だいすき♥」（8歳頃の作品）

コラム

初等教育学科１年　池田康輔

インターネット上で気になる記事を見つけたので紹介します。それは、「牛乳が子どもの体と心を蝕む」というテーマで書かれた、牛乳を批判している文章です。「牛乳普及と骨折の増加」の書き出しではじまる文章もあって、読むのが怖くなってしまうほどのインパクトがあります。でも気になるのでざっと目を通してみましたが、牛乳を飲んではいけないような錯覚にとらわれてしまいました。ん？　ちょっと待ってください。それなら人間のために搾乳されている乳牛たちの立場がないじゃないですか。しかも僕は牛乳が大好きなのに。このまま情報を鵜呑みにしてはいけない。もしかしたら記事の執筆者は単なる牛乳嫌いなだけかもしれない。そう感じてこの記事に載っている参考文献を読むことにしました。

牛乳から栄養を取るには乳糖分解酵素が必要なのですが、日本人は遺伝的にその消化酵素をあまり持っていないために牛乳を飲んでも十分な栄養摂取にはなりにくいのです。それに、カルシウムも鉄も多く含まれている飲み物といえば牛乳だと広く知られているため、牛乳よりも栄養が多い食材が他にもたくさんあることを見落としがちなのだ、というのです。

確かに執筆者はこれらの点をもって牛乳を批判しているように見えましたが、批判していたのは牛乳ではなく私たちの考え方ではないかと気づきました。牛乳を一つの栄養ドリンクとして見ていた私たちに、執筆者は厳しい言葉や表現で訴えかけてきているのではないでしょうか。「牛乳をおいしく飲もうよ！」そんな叫びが記事を通して聞こえている気がします。おやおや、つまり執筆者は牛乳好きだということになりますね。

偶然見つけた記事が牛乳と真剣に向き合う時間を与えてくれました。食べ物に関することだったから真剣になれたのかもしれませんが。この調子でこれからも初等教育の勉強と並行してどんどんいろいろなものに触れていこうと思います。

参考文献
・真弓定夫『自然にかえる子育て（食べもの文化7月号別冊）』，芽ばえ社，2007年
・石毛直道　チョンデソン『食文化入門』，講談社，1995年
・『牛乳が子どもの体と心を蝕む』，世論時報，アクセス日2007年12月19日，<http://www.seronjihou.co.jp/thema01.htm>

編集後記

「初等教育学科だより　色えんぴつ」第２号をお届けします。この学科だよりは年２回の発行ですが、本号からは、学生編集委員も加わり、さまざまな企画をした楽しい紙面構成となりました。次号の発行に向けて、ご意見、ご感想などお聞かせいただければ幸いです。

学生編集委員／池田康輔、岩瀬拓也、奥野沙也佳、尾藤恵理子、加藤秀行、小林啓人、高野昌幸、田中徹哉、山田高良
教員編集委員／秋吉博之、古山典子、棚田真由美、原奈津子